



独立行政法人

国立特別支援教育総合研究所

National Institute of Special Needs Education

令和6年度全国特別支援学級・通級指導教室設置学校協会協会 第3回全国理事・研修協議会

研究主題 「切れ目ない支援体制の構築」

～一人ひとりが自分事になるための視点から～

2025/01/24

国立特別支援教育総合研究所
情報・支援部 学校教育支援・連携担当
滑川 典宏

特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告

1. 管理職

(学校全体による支援体制の構築、対話や研修の奨励)

- **全ての学校**において、管理職は、**特別支援教育を学校運営の柱の一つとして据え、自ら専門性を高めるとともに、特別支援教育をリードしていかなければならない。**
- 具体的には、管理職は、**特別支援教育に関する教員育成指標**や、研修受講履歴等を手がかりとして、**教師本人と積極的な対話**を行うとともに、**キャリアアップの段階を適切に踏まえる**などしながら、教師本人の**モチベーション**となるような形で、**適切な研修の奨励**や**人事交流等**を推進することが重要である。また、**学びの契機と機会を確実に提供**するとともに、**学校外の資源も活用しながら**、学校全体で特別支援教育の支援体制を構築していくことが重要である。
- その際、教師一人一人が、その後のキャリアパスに対する不安を感じることなく、特別支援教育に関する新たな学びに参加しやすくなるような環境整備、業務の調整等を、教師の成長に責任を有する管理職が積極的に講じるとともに、**協働的な職場づくりを構築**することが求められる。

〈具体的方向性〉

- ・ 管理職（特に校長）は、学校全体の課題として特別支援教育が取り組まれるよう、学校教育目標や目指す教師像など学校経営方針や学校経営計画において特別支援教育に関する目標を適切に設定するとともに、各学校が行う学校評価の中核となる評価項目・指標としても必ず盛り込むこと。
- ・ 校長は、各教師に適切な経験が得られ、**納得感を持って特別支援教育に前向き**に取り組まれるよう、各教師との**積極的な対話**を図ること。

**実践発表 1 滋賀県教育委員会特別支援教育課
主 査 平井 美穂 様 のご発表から**

特別支援教育の視点に立った「個別最適な学び」推進事業

現状と課題

- ・多様な教育的ニーズに対応する専門性の必要性
- ・個別の指導計画の内容の充実や活用促進、実際の指導と結びついた計画の作成及び活用

施策の方向性

- ・通常の学級において、一人ひとりの特性や発達障害等による学びにくさに応じた教科指導に対応できるよう教員の専門性向上
 - ・個別の指導計画と教科指導を密接につなぐことができる指導・支援の質の向上
- ➡特別支援教育の視点に立った「個別最適な学び」の実現

現状と課題

OPDCAサイクルによる個別の指導計画を中心に置いた教科指導の実践

○特別支援教育の視点に立った「個別最適な学び」の啓発・普及

- ・特別支援教育アドバイザーの派遣➡**人でつなぐ**
- ・情報発信、個別の指導計画を中心に置いた教科指導の実践、ICT機器等を活用した一人ひとりに合った支援方法等の普及➡**情報をつなぐ**
- ・**実践事例授業づくりのヒント集の作成**➡**支援をつなぐ**

☆指導・支援の質の向上+切れ目ない指導・支援

➡一人ひとりの「個別最適な学び」の実現

■ 青森県総合学校教育センターホームページより引用

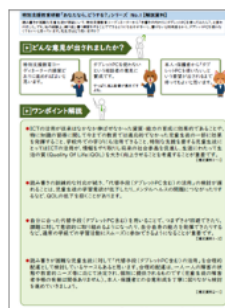
マナビカタ 発見 プロジェクト

理解啓発研修コンテンツ

特別支援教育研修「あなたなら、どうする？」

研修の概要

目的	読み書きに困難のある児童生徒（＊）への対応について考える演習・協議を通して、「自分に合った方法で学ぶ権利を保障する」という視点について共通理解を図り、特別支援教育における支援・配慮の在り方について理解を深める。 ＊本研究では、全般的な知的発達に遅れがない児童生徒を想定しています。
対象	教職員（小・中学校等）
時間	20～30分
準備物	☐ ワークシート ☐ 解説資料 ☐ 補足資料（解説に必要なものだけでよい）
進め方	こちらの資料を御参照ください。 「あなたなら、どうする？」研修の進め方.pdf



■ 青森県総合学校教育センターホームページより引用

マナビカタ 発見 プロジェクト 特別支援教育研修「あなたなら、どうする？」

特別支援教育研修「あなたなら、どうする？」シリーズ No.3【ワークシート】

Q 読み書きが困難な児童生徒に代替手段としてのタブレットPC活用（例：手書きの代替としてキーボード入力）を検討したいのですが、周りの児童生徒から「なんて〇〇さんだけ？」「ずるい」という声が上がりがりそうで心配です。学級でどのように説明すればよいでしょうか？

①個人で考える「私ならこうする」



②近くの人とディスカッション



③解説を聞く

④リフレクション（省察）



特別支援教育研修「あなたなら、どうする？」シリーズ No.3【解説資料】

読み書きが困難な児童生徒に代替手段としてのタブレットPC活用（例：手書きの代替としてキーボード入力）を検討したいのですが、周りの児童生徒から「なんて〇〇さんだけ？」「ずるい」という声が上がりがりそうで心配です。学級でどのように説明すればよいでしょうか？

▶どんな意見が出されましたか？

「ずるい！」という声が上がったら、学級全体でとことん話し合います。

「ずるい」という声が上がりがりそうな学級であれば、規律が乱れるリスクがあるので、タブレットPC活用は保留にします。

周りの児童生徒に何をどこまで説明してよいかを保護者に確認します。



▶ワンポイント解説

●普段から学級内において温かい人間関係づくりに努めながら、「特別な支援の必要性」の理解を進め、互いの特徴を認め合い、支え合う関係を築いておくことが大切です。
【補足資料1-4】

●みんなと一緒に学習したり、同じ内容のテストを受けたりするために、困難なことに応じて学習の“手段”を変えるだけであることを伝えます。例として、骨折した人が松葉杖や車いすを使用すること、聴覚障害の人が補聴器を利用すること、視覚障害の人がメガネをかけること等を示してもよいでしょう。
【補足資料1-3】

（参考） NHK for School「u&i」に掲載されている「アイツだけ、ずるい！」

▶ テストにおけるタブレットPC活用について10分間の動画で分かりやすく解説されています。
学級で視聴することで「特別な支援の必要性」の理解を深めることができます。
https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?doc_id=D0005190179_00000



●周りの児童生徒に説明する前に、そのタイミングや説明内容等について本人・保護者の了解を得る必要があります。その際、必要に応じて、学年主任や特別支援教育コーディネーターが同席することも検討しましょう。担任個人の裁量ではなく、学校として組織的な対応を行うことが重要です。

青森県総合学校教育センター・令和4年度センター研究・特別支援教育チーム「マナビカタ発見プロジェクト」読み書きの困難さをタブレットPCで補おう～

教育現場の先生 が自分事として 考えるための工夫



■各自治体の「調査・研究を共有し、活用するために」に関する工夫や取組の自由記述から

1. 必要な情報の精選
2. 読み返しやすさの工夫
3. 内容のインパクト重視
4. 研究成果のWeb公開
5. 研修講座での活用、伝達
6. 積極的な広報活動
7. 指導主事による学校訪問・出前研修
8. 学校のニーズに応じたプログラムの検討
9. キーパーソンへの情報共有
10. 先生方が自分事になる工夫 等

各自治体や学校の
強みや課題の整理に
活用してみませんか。



研究主題 「切れ目ない支援体制の構築」

— **つながり**を大切にした特別支援教育の充実を目指して —

今すぐ、できる人・わかる人になるのは難しい。

でも、今すぐ、できる人・わかる人となつなぐことはできる。

【引用文献】

全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 ホームページより引用

「全難言協が考える『専門性』について」 前全難言協事務局長 阿部 厚仁 先生

<http://www.zennangen.com/img/senmonsei1.pdf>

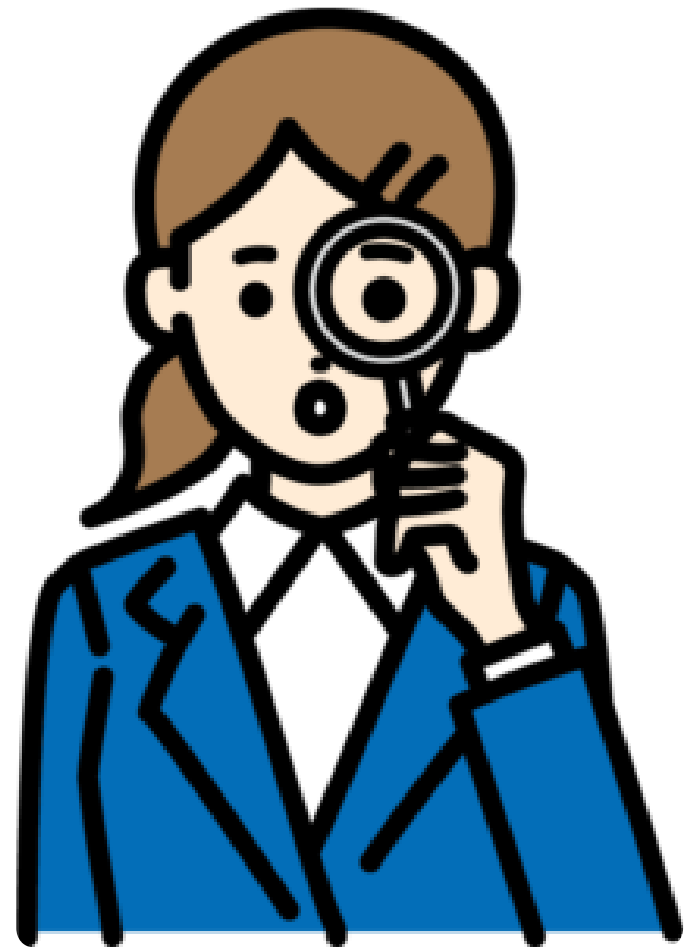


実践発表 2 東近江市発達支援センター 指導主事 今村 香代乃 様のご発表から

- ・相談件数の増加
- ・東近江市発達支援センターを中心にした取組
- ・ライフステージを意識した支援の実際

○サポートファイルの活用

- ・保護者さんが持参された時に、興味をもつ、読ませてもらう、説明してもらう
- ・保護者がどんな思いかを察し、まずは受け止める。前任者の効果的な支援を隙間なく繋ぐ



○ことばの教室と関係機関が相互に理解を深め、 協働した「連携」をするために

- ・日頃から**顔が見える関係**づくり
- ・気軽に**連絡を取り合える関係**づくり
- ・学校、関係機関等の**情報共有**
- ・子どもを中心とした、相互理解を深めた**支援**
の**相乗効果**



感謝する
気持ち

それぞれの立場で協力し合いながら、バトンを繋ぎ、コ
ミュニケーションの楽しさや嬉しさを「**共に育む**」
→「**共育**（きょういく）」の大切さ

【参考資料】

第52回 全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会 全国大会、第55回 全国
情緒障害教育研究協議会 全国大会 埼玉大会 第九分会 提案資料より引用

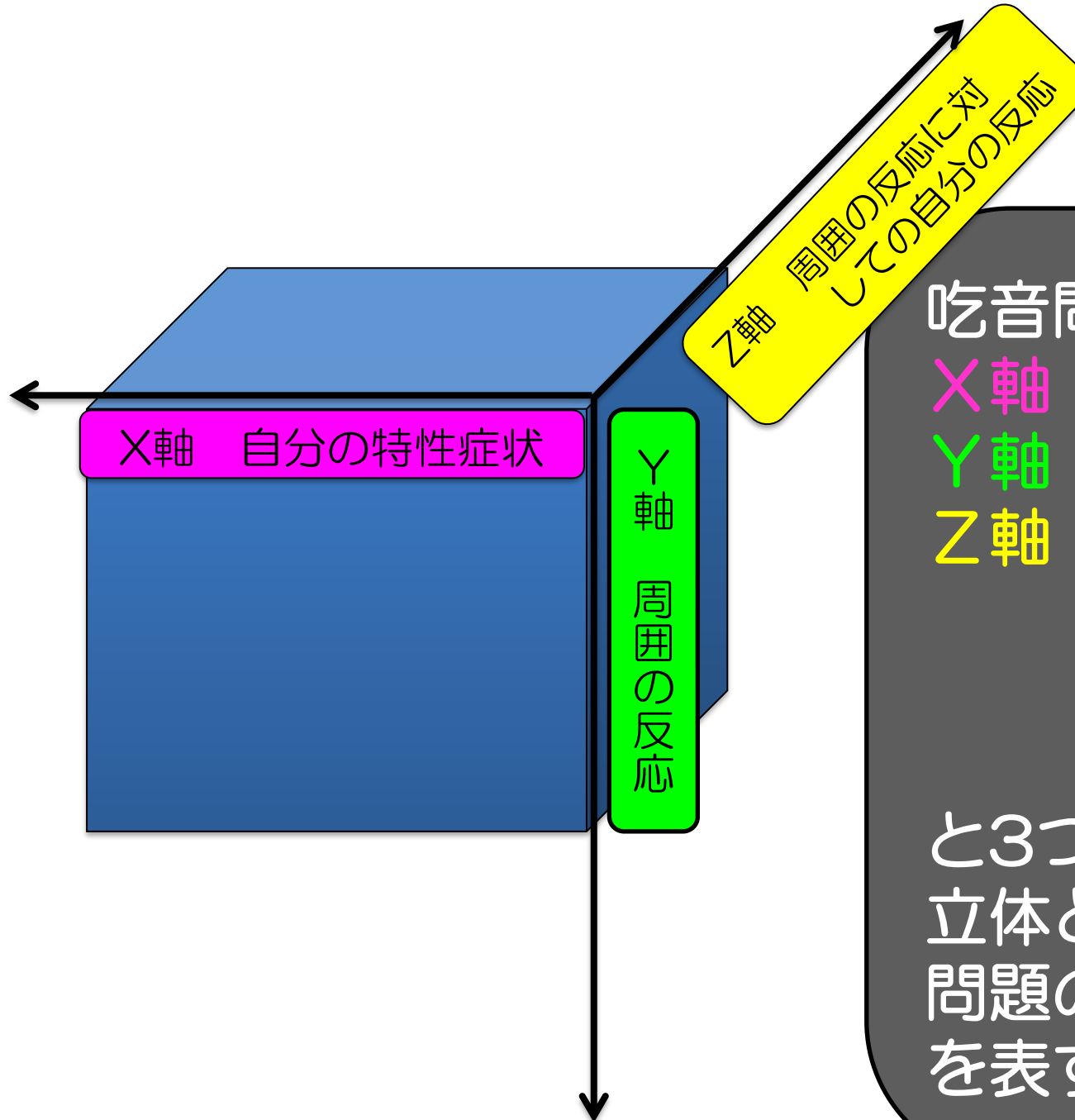
つながり（連携）を育むために



立場や接する場面の違いは、子どもを多角的に見ていくために、とても参考になります。同一歩調で子どもに対応することを目指す
と、かえってその利点を捨ててしまう恐れがあります。「**共通理解**」
というのは、「**みんなが同じ見方をし、同じ対応をすること**」ではなく、
「**それぞれの立場について理解し、お互いの見方・考え方を知っておくこと**」
だと思います。それぞれの立場の利点を活用して、**適切な役割分担**ができるように、
「共通理解」を進める必要があります。在籍学級の担任の先生とことばの教室
担当がそのような関係を築き、お互いに協力しながら子どもの指導に
取り組むのが「連携」の在り方だと思います。

ジョンソンの言語関係図

Johnson.1970



吃音問題を、

X軸：自分の特性症状

Y軸：周囲の反応

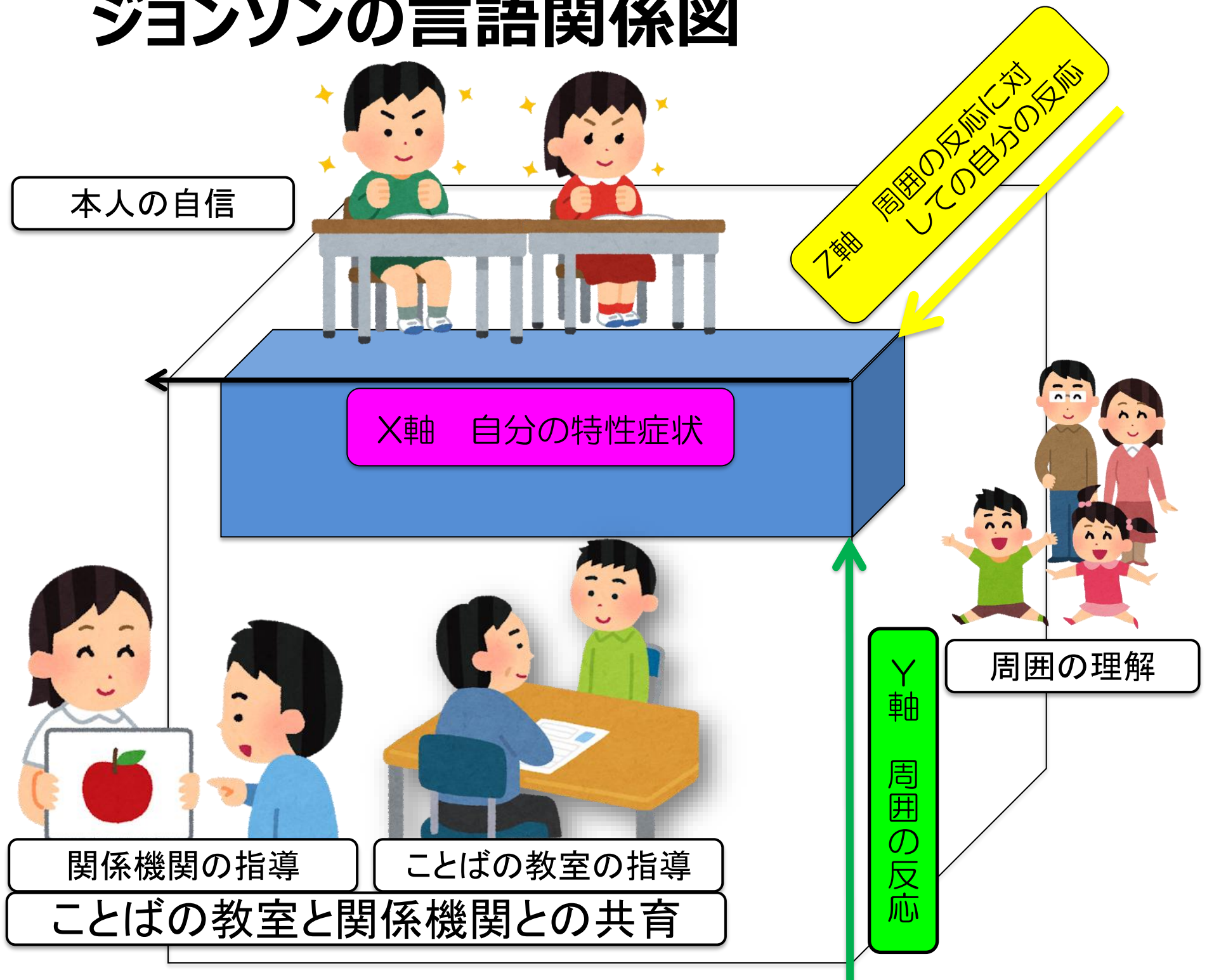
Z軸：周囲の特性の反応
に対して、自分が
どう考えたり、悩ん
だりしているのか

と3つの軸（要素）による
立体として捉え、障害の
問題の大きさや特徴など
を表すとした。





ジョンソンの言語関係図





独立行政法人

国立特別支援教育総合研究所

National Institute of Special Needs Education